

られてゐる大衆の行動がある。

私の小著「支那の性格」は斯ふした現代支那の持つ多角形的な性格を語らうと意圖するものである。だが、この小著はタツチの荒い單なるスケッチでしかあり得ないことを斷つておかねばならない。そして、これは又、私が都新聞の特派記者として支那に渡つた時のルポルターヂを中心にして、「日本評論」「世界知識」「セルパン」等に發表したものを再現したのであると云ふことも。

尙、私のこの小著は私の貧困な支那研究生活に對して最もよき理解と鞭撻とを惜みなく興へて下さる安達勝清先生に心からの感謝をこめて、デヂケートするものであります。

昭和十二年一月

著者

目次

危機線上の上海.....一

    卑頭苦力の温容な態度とさびれ切つた邦人商店街——暗躍する英米軍需工業者の陰謀——  
    民衆の抗月は？——黄包車の細民避難——食り讀まれる抗日雜誌

反日感情の動向.....一〇

    抗日心理が描く『蕉土戰』の覺悟——軍備の蔭に喘ぐ裸身四億五千——大政治は？——大  
    經倫は？——人民戰線か？國民戰線か？——階級闘争休戦。抗日共同戰線へ

抗日運動の指導者王造時博士と語る.....一三

    抗日最大の武器は何か——日本に欲求するもの——日支若し戰はば？——抗日一戰の對内  
    的諸準備は何か？

抗日戰線の巨頭章乃器と語る.....一五

    人民戰線か？國民戰線か？——民族運動か？階級闘争か？——抗日救國會と蔣介石

抗日の巨頭馮玉祥.....一七

馮の第一期轉換時代——馮の第二期轉換時代——馮の第三期轉換時代——馮の第四期轉換時代

蒙古の嵐…………… 五

『内蒙自治・赤化排蒙』切届に南京政府狂奔——新しい『蒙古の嵐』の意義——德王の自治運動沿革——支那の複雑な民族解放戦・偶像成吉思汗——漢民族商業資本の支配

張學良の叛亂と支那…………… 六

西安兵變の重大性——西安クーデターと共產軍及び列強の地位

西安兵亂解決と抗日國家運動の前進…………… 七

西安事變が教へた支那の現實——國民解放運動の勝利——國府の現實と日本の脅威

對支認識の再検討…………… 六

蔣政權を尻目に盛り上る國民の『民族意識』——抗日支那の質量的變革——蔣政權の強韌性と脆弱性——抗日運動と南京政權との相剋——民衆唱和の攘夷論——南京政府を支持する英米——日本包圍の遠心的國際陣形——孤立日本の外交

Miscellaneous notes

支那の國防文學…………… 五

國防文學の背景とその主張——國防文學の内容——國防文學の民族性

支那プロ文壇の崩壊的危機…………… 五

硬壓下の文學闘争——『中國左聯』發祥小史——『中國左聯』の派別闘争

支那革命と女流作家丁玲…………… 一五

一軒隣の魯迅先生…………… 一七

魯迅先生の地位——魯迅先生の平素と懷古談——支那沙漠論——日支智識份子合作——國民黨と暮を打つ魯迅先生——日本訪問を希望する魯迅先生

支那共產黨内の派別闘争…………… 一四

白色テロルと内部對立——陳獨秀の反コミンテルンと李立三——江蘇派の反李立三闘争——労働派・反老幹部派——ミフと入露派——派別闘争の現段階

支那ソヴエート區の婦人と結婚問題……………一五

    支那革命と婦人の役割——結婚問題と民主的婚姻制度

上海各國駐屯軍……………一六

    デイトタイムの點描——ナイトタイム點描——駐屯軍

汪精衛襲撃事件……………一七

北支密輸入問題……………一八

    北支密輸入に對する南京政府の工作——北支の密輸入による支那の損失——北支の密輸と『日本の責任』

支那をめぐる日英米の關係……………二〇

    日英對支協調か？對立か？——日本の對支前進政策を警戒する英國——南方支那に於ける日本の勢力

起ち上る支那の姿

正確に認識し、評價することによつて新たに<sup>て</sup>直されなければならない。

## 對支認識の再検討

### 蔣政權を尻目に盛りよる國民の『民族意識』

日本の朝野から熱意的な期待と關心を懸けられてゐた蔣介石と川越大使との南京會議も、蔣介石が逆に對日要求を提議したと流布されたのみで、後續交渉は張外交部長に轉嫁され、蔣介石は杭州に赴き、そこで、彼は山東から南下して來た韓復榘を始め、山西清鄉督辦徐永昌、陝西綏靖主任楊虎城、冀察政務委員會秘書長戈定遠、軍事委員長蔣伯誠等と北支問題を中心に協議し、馮玉祥をして隴海線一帶に集結されてゐる中央軍十ヶ師の配備状態を視察せしめ、或は駐米大使王正廷及び駐ソ大使蔣廷黻と鼎座して、日本の對ソ支選

出に關するソ聯との協調工作と米支共同工作を圖るべく重要協議を遂げ、更に數百萬磅の英支輸出借款を發表した。

### 抗日支那の質量的變革

斷乎たる日本の最後の決意の下に進捗せしめられてゐると云ふ一觸即發的な危機國交の外交交渉の下にありて、蔣介石が斯の如き大膽な態度と餘裕とを表示し得るのは果して蔣介石の力であらうか？ 又は、技倆であらうか？ 支那の民衆は自國の完全な………の轉落と、民族の救ひ難い………とを眞實に認識し、體驗してゐる。そしてこれらの過程と闘ふ爲にあらゆる力の凝結に向つて努力してゐる。このことが蔣政權の貧困な政治を、外交を、或ひは慘虐なテロリズムをすら最大限度に耐へしむる重大な要因となつてゐるのである。

『滿洲事變以前は排日、排日貨を強要されてわれわれは之に従つた。だが、現在のわれわれは排日も排日貨も行はない。無論日貨も購買する。だが、同品同質であつて同じ價格で

ある場合は勿論、劣品劣質であつて、價格が高い場合でも、出來得る限りわれわれは國貨を手にする。これはわれわれの良心がそうせしめるのである。抗日の力を強大にして鞏固にせねばならぬと云ふわれわれの自覺がそうせしめるのである」と、或る支那人が語つた。ここにわれわれが見出すべきものは民族意識の自覺である。支那の民衆の間に斯うした民族意識と政治的自覺を喚起するものは誰であらうか？ 或は何であらうか？

私はこの問題を支那の評論家に、政治家に、大學教授に、新聞記者に、民衆に質問した。「蒋介石は一切の進歩的な思想と、革命的な主義と、そして、武器と自由とを民衆から剝奪してしまつてゐるのに、そればかりでなく、暗黒と無智と盲目と無抵抗とを民衆に教へてゐるのに、どうして、彼等の間に民族意識と政治的自覺とが擡頭し、進展してくるのであらうか？」と

それに対する解答は次の如く誰しも同じであつた。

「それは民衆がそのやうな状態に緊縛されてゐる條件が、環境が教へるのです。現在の支那の民衆は彼等がそらした状態に置かれてゐるのは、蒋介石の個人的な暴壓によるのでな

く、その背後に潛在してゐる一層大きな國際帝國主義の壓力によるものであることを、殊に、當面の問題としては……進攻によるものであることを感知してをります」

これが現實支那の動く民衆の姿である。而も、斯うした民衆の自覺は指導階級たる知識分子及び學生大衆によつて、刺戟され、且つ、情熱を吹きこまれてゐる。

### 蔣政權の強韌性と脆弱性

かつて支那革命の前衛工作隊として、農村に、或ひは工場に進出して行つて、農民と勞働者に革命の魂を植へつけ、北伐を成功せしめた知識分子及び學生大衆は、今また、農村に、工場に進出して抗日救國の民衆革命戦争をプロバガンダしてゐる。彼等の行く處、そこには彼等の聲に和唱する民衆の聲がある。この民衆の聲を無視し、蹂躪するところに軍閥の勢力も蔣政權の壓力もあり得ない。この民衆の聲を充分に評價し得なかつた閥軍閥が閻錫山であり、馮玉祥であり、張學良であり、劉湘であり、陳濟棠であるが、同時に、

蔣政權が今日の地位を獲得し得たのは單に彼の策謀と叡智にのみよるのではなくて、實に彼がよく自己の態度を民衆の聲にミートし得たからである。こゝに蔣政權の中央集權的な發展の重大な原因があると云へる。

だが、こゝに又蔣政權の脆弱さがあるとも云へる。この故に、蔣介石は日本の評論家が云ふ如く、支那民衆の民族精神の高揚をユナイライズして、ただ自己の地位を擁護する爲にのみ外國から購入した飛行機と、大砲と、爆彈を、又は、先進諸列強國から招聘した軍事教官の訓練下に指導した精銳な部隊とを抗日の戦線に動員せざるを得ない岐路にたゞされてゐるのである。

われわれは蔣介石と支那の民衆との斯うした相關を今日まで餘りにも等閑視してはゐなかつただらうか？ 餘りにも無評價に看過して來てはゐないだらうか？ 或ひは又、われわれが廣東の陳濟棠が戦はずして、蔣介石に城下の盟を誓つた事を知り、山東の韓復榘が杭州へ蔣介石を訪ふて南下したのを見た時、われわれは餘りにも蔣の力を過大に、寧ろ驚異的に評價してゐなかつただらうか？

われわれが蔣介石に向つて、支那民衆の抗日運動を取締れと要求する時、或ひは、國民黨部の抗日教育を撤廢せしめよと抗議する時、われわれは蔣介石の政權を、力を、擴大鏡にかけて見てゐるのではなからうか？

### 抗日運動と南京政權との相剋

儘かに蔣政權が樹立されて以來、軍閥間の内亂は鎮定され、土匪の跋扈はよく剷蕩され、封建的苛捐雜税は殆ど廢止され、統一と復興と建設とが進捗し、禍亂から秩序へ團結へと發展し、道路の建設と交通の延長は著るしく、教育も衛生も進んだ。

そして、現在の半植民地的な束縛下から完全な解放と獨立とを要望してゐる支那に、その爲の物質的な諸條件、例へば、關稅自主權、稅制の統一、金融貨幣權の確立、軍事の中央化等々を戦ひ奪つた。だが、蔣介石が大言する如く、彼が八ヶ年間に戦ひ奪つたこれらの支那史上未曾有の成功は起ち上る四億五千の民衆との關はりに於いてのみ正當に評價されるべきであつて、この關はりを無視しては正確に認識することは出來ない。

## 民衆唱和の攘夷論

支那の一般民衆は半植民地下の自己の民族的解放と祖國の領土自衛と云ふ當面の切實な問題に熱中し、その成功の爲には蔣政權に對して一切の屈服を忍び最大の忍耐を拂つて、國內の和平統一と外敵の打倒に向つてゐる。攘夷！攘夷！彼等が唱和する熾烈な攘夷の聲は、山間に、野原に、工場に、家庭に、或ひは學校に、街頭に氾濫してゐる。

だが、この攘夷の聲は獨伊に見出し得るが如きファツシズムでもなければ、ナショナルイズムでもなく、多分にデモクラティックな響きを帯びてゐる。こゝに重大な問題が提議されてゐる。即ち、ファツシズム的に自己の政權を擁護せざるを得ない基礎の上に立つてゐる蔣介石氏が再度革命の裏切りによる上海大クーデターのテロルを繰返さざるを得ない條件が伏在すると同時に、現存するソワイエト政權の發展を促進する條件が横たはつてゐる。このやうな色彩と要素とを持つ支那の民衆に對して、日本は餘りにも無頓着であり、無策ではなからうか？

奴隸的な重壓下にひしがれてゐる支那の民衆を眞に解放し、彼等に平和と樂土を與へんとする日本の高遠な大理想を蔣介石が認めず、従つて之に誠意を披瀝し、且つ、参加しない場合に、蔣政權を顛覆するなら、それもよからう。だが、若し日本が蔣政權を倒す以前に、支那の民衆に對して、日本が抱藏し、計畫してゐる高遠な大理想を具體的に表示することを忘れてゐるなら、そこに殘存するものは依然として攘夷の聲であり、且つ、そこに反撥して來るものは依然として抗日あるのみであらう。

かくて、再び日本が支那の民衆と戦はざるを得ないとするなら、それは日本の高遠な大理想を遙かに離れ去るものではなからうか？ 日本が蔣介石に對して、日支國交上の彼の不誠意を非難して、その斷乎たる排撃に向へば向ふ程、蔣政權は支那の民衆に支持されて來る。この問題の根本的關鍵は日本が支那の民衆に對して自己の抱藏する高遠な大理想を理解せしめてゐないことに多分に求められる。

會て私が復旦大學を訪れ、男女の大學生に向つて「蔣介石は支那革命を裏切つてゐるに、何故、支那の國民は彼を支持するのであるか？」と質問したのに對し、彼等は異口同音に

明快な口調で即答した。

「われわれは蔣政権に心服するものでも、或ひは、支持を與へるものでもありません。寧ろ彼の進歩的文化的建設への裏切りと反動文化の押しつけに對して闘争するものです。だが、現在の状態は抗日を行ふ爲に、蔣政権への闘争を停止することが、蔣政権の進歩的文化的裏切りと反動化への闘争を意味してゐるのです。何故なら、われわれが日本の壓力を除けば、同時に、蔣介石の暴壓を刎ね返すことが出来るからです」と。

この大學生等の回答を眞に理解することによつて、新なる對支認識を生み出し得るのではなからうか？

### 南京政府を支持する英米

日本は滿洲上海兩事變以來、躍進し、發展した自己の勢力を所謂天羽聲明によつて闡明した如く、東洋の安定勢力として世界各國が承認を與へてゐると云ふ錯覺を犯してはゐないだらうか？

儘かに英米及び爾餘の諸列強は滿洲事變後の日本の對支進出勢力を認めた。サイモン・ボーズが英の外交を指導し、スタムソン・ドクトリンがルーズベルト大統領に改訂されたことも事實である。だが、それには條件が付與され、限度が置かれてあつた。即ち、英米を指導者とする國際諸列強は、日本の對支進出が滿洲で止まり、出來得べくんば日ソ戰を激發し、決してその勢力が北支に、中部支那に、或ひは南部支那に漸進してこないことと云ふのであつた。

だが、躍進日本の勢力は彼等白色イムペラリストの希望と待期とを裏切り、屢々滿蒙の國境を挟んで日ソ戰爆發の危機が唱へられたにもかゝらず、北支に、中部支那に、南支に發展して來た。

サイモン・ボーズから割り出された英國の外交は最大可能な限度に於いて日本と對支合作を圖り、南支を中心とする自國の經濟權益を確保するにあつた。だがその企圖するところに日本が應諾して來ないことを、英國はリース・ロス・ノの日本訪問によつて明確に認識せざるを得なかつた。さなきだに支那の財政危機の前に晒されてゐた自國の在支投資權益を守



偉大な時に於てすら、一部には尙宗派觀念を抱藏し、セクト主義に陥入り、關門主義の幼稚な段階に停滯してゐる。近來多くの情熱的な青年朋友に接觸して、彼等から聞く共通の苦悶は、彼等を指導する健全な組織がないと云ふことである。これは從來の組織構成分子がひとしく閉關主義に立ちこもり、門戸開放を肯せず、進歩的青年をして植民地民族解放闘争に共同に参加せしめないからである。」

かくて、國防文學論者は抗日國民聯合戦線と國防政府の樹立との成功が當面の問題として日程にのぼつてゐる今日、政治を反映し、政治を推進する文化團體として、支那の文藝工作者は亡國奴の作家たらんよりは、文學上の廣大な國防陣營を建立せよ、と結んでゐるのである。

### 國防文學の内容

世界帝國主義の鐵鎖を切斷せんとする半植民地及び植民地諸國の被壓迫民族の解放運動は重大な意義を帯びてゐる。何故なら、「植民地解放戦争は、……と國防文學論者は云ふ

……現在の世界體制を破壊するものであり、即ち、資本主義制度を潰滅するものであるから。」と、彼等は更に言葉をつづける、「帝國主義は植民地の原料市場と貿易市場と投資市場とに依據してゐる。言葉を變へて云ふなら、植民地が帝國主義の生命の源泉となつてゐる。故に、帝國主義時代に於ける今日の民族解放闘争は單に帝國主義の世界經濟體系を打破するばかりでなく、必然的に帝國主義國の階級闘争を促進し、同時に又、世界の自由王國への飛躍を促すのである。」と。

國防文學論者は斯うした世界觀から、彼等が提唱する國防文學は鬪武主義の（武力謳歌の）文學でもなく、又、奴隸的國防文學でもない。我等が頌歌する戦争は反帝反漢奸の戦争である。それは殘酷な戦争でも、進化を阻止する屠殺戦争でもない。と云つてゐる。イタリアの作家がアビシニアの反抗を頌歌することはいい、だが、彼等がイタリアの侵略戦争を頌歌するなら、彼等は鬪武主義の奴隸作家に墮落してゐるのだ。これと同様に、國防文學は侵略主義の文學ではない。作家はひとしく自己の使命を認識、自己の使命は民族の解放を謀るところにあることを自覺すべきである、と國防文學論者は主張してゐる。

以上のことよりして、國防文學の内容は反帝、反漢奸、反封建であると云へる。これは半植民地及び植民地諸國に於ける被壓迫民族の解放運動とその革命が反帝反封建を主要内容としてゐることとの連關に於いても考察されるのである。

「反帝闘争の過程に於いて、……と國防文學論者は云つてゐる。……漢奸闘争を戦はねばならぬ。漢奸と帝國主義とは不可分の關係にある。漢奸を打倒せずしては武國主義を打倒することは出来ない。然るに、一部には、漢奸は帝國主義に依據するが故に、只帝國主義をのみ打倒すれば、漢奸は自然に倒れる。と主張するものがある。之は非常な誤謬である。反帝闘争の過程に於いては、先づ漢奸を槍玉にあげねばならないのである。北平の學生運動が好個の例證である。反帝闘争の最初の段階は反漢奸闘争である。我等は反帝闘争を行はねばならぬが同時に又反漢奸闘争を行はねばならない。反帝反漢奸の連撃運動に起ち上る時に於てのみ民族解放の成功は可能となるのである。國防文學は以上を内容とする。反帝闘争に於いて、大衆の反帝的感情を鼓舞し、同時に又、反漢奸闘争に於いて、漢奸の醜惡な行爲を、賣國的行爲を暴露するものである。」

即ち、國防文學論者は、彼等の主題を民族の自衛に求め、その題材を民族自衛運動の一切の現象の中に探り、之を暴露文學、或ひは報告文學の形態の下に發表せんとしてゐるのである。

「我々の民族が持つ歴史は、……と國防文學論者は云つてゐる。……遼くは阿片戦争から、近くは九・一八事變に至るまで、最も偉大な、最も豊富な文學資料を提示してゐる。我々が史實を深く掘り下げ、民族の不幸な歴史の中に綴られた死せる大衆の白骨の上に残つてゐる鮮血の裏に刻まれてゐるものを掘み、之を各自の特殊な手法で描寫することも、彫塑することも、模造することも、表現することも出来る！我等は民族文學の偉大な作品を産むことも出来る。」

國防文學の素材は單に斯うした史實の中のみ求めなくとも、現實に展開してゐるものの中からも非常に豊富に求められる、又、現實の中に素材を求めた方が、一般大衆を民族解放戦線に、抗日救國戦線に動員すると云ふ政治的プロパガンダーとアヂテーションの意義を多分に付與されてゐる國防文學の目的に一層適合してゐるかも知れない。

### 國防文學の民族性

國防文學の任務は、既に屢々論究した如く、反帝反漢奸の闘争力量を結成し、擴大せしめることにある。このことより當然國防文學は反帝反漢奸の主力軍のものであらねばならぬと云へる。反帝反漢奸の主力軍は云ふまでもなく支那の人口の大部分を占める農民と労働者としてである。だが、國防文學が彼等労働大衆の手で創造されてゆくか、どうかと云ふことは別問題である。何故なら、支那の被壓迫民族の解放と云ふ革命はブルジョア・デモクラシーをその基本的主要内容としてをり、民族ブルジョアデリーの買辦性を充分に評價しても、現下の如き國家の存亡、民族の危機と云ふ特殊な條件の下においては、反帝民族闘争のヘゲモニーを掌握せんとするであらうから。殊に、一帝國主義の進攻の下にそうした壓力をうけ、自餘の帝國主義列強からは利害關係上支持と援助とをうける場合にはそうした状態は必然的にクリエイトされてくる。

現在の支那の抗日民族運動は儘かにそうした状態の下に置かれてゐる。だから、國防文

學論者が意識するとせぬとにかかはらず、或ひは又、彼等が「國防文學は何よりも先づ支那の労働大衆の文學であり、民族の社會解放闘争の上におかれてゐる全支那民族の文學である」と主張すると否とにかかはらず、支那の民族解放闘争の政治的指導者が民族ブルジョアデリーであれば、當然そこには重大な問題が提起されてくる。現に又提起されてゐる。即ち、國防文學は眞に労働大衆のものであるか？ それともブルジョアデリーのものであるか？ と。

このやうな問題が提起されてくるのは、支那の現下の被壓迫民族の解放と云ふ闘争が半植民地的諸條件の下に展開してゐるからである。

民族運動はその本質においてブルジョア的であり、その運命は當然ブルジョアデリーの運命と結びついてゐるのである。即ち、ブルジョアデリーがそのブルジョア階級闘争に成功すれば民族闘争に成功するのである。だが、半植民地及び植民地諸國に於いては、民族ブルジョアデリーが封建制度の清算に成功しても、反帝闘争を完全に戦ひ奪らぬ限り、眞の解放は到來しない。半植民地及び植民地諸國のブルジョアデリーは反帝反封建の民族運動の中に

プロレタリアート及び農民を引きこむことに成功するが、そして、その場合、民族闘争は表面的には、一般國民的性質をとるが、それはただ表面だけに過ぎないのであつて内實は常に主としてブルジョアデーに利益をもたらすしまた彼等に都合のよいブルジョアの闘争に過ぎず、ある段階に到達すれば帝國主義と妥協するのである。かるが故に、レーニンは「植民地の革命はブルジョア・デモクラシーをその基本的内容としてゐるが、それはプロレタリアートの革命と云ふ戦略の下に展開されぬ限り、被壓迫民族の解放には成功しない」と云つたのである。

ことに先に提示した問題、即ち、國防文學が單に支那のブルジョアデーの民族闘争の文學として終るか、それとも農民及び労働者の全被壓迫勤勞大衆の眞の解放の文學として發展するか、と云ふ問題が発生して來るのである。

この問題について矛盾等の國防文學派に對して、魯迅及び胡風等が「民族革命戦争の大衆文學」と云ふ旗幟を擧げて、支那革命がレーニンの云ふ路線に沿つて展開されるべきものと云ふ前提的なイデオロギイの下に活潑な論争を捲き起して來たことは注目すべきであ

る。だが、魯迅が死んでから、この一派の主張はとみに力を失ひ、國防文學派の勢力が支配的にまで發展して來てゐる。

とまれ、國防文學論者は、支那が當面してゐる現在は、家を棄て國難に當るべき、所謂「アノ家許難」の秋であるが故に、ブルジョアデーもプチ・ブルも非常に反動的であり、革命的であると主張して、彼等の階級性に對しては何等の考慮も検討も加へてゐない。

されば、支那の國防文學は、抗日を唯一の目標としたブルジョア的の民族闘争の一所産としてとりあげられた形のままであると云へる。

## 中國プロ文壇の崩壊的危機

### 彈壓下の文學闘争

一九二七年、蔣介石が聯俄容共合作による民族自決の國民革命運動を裏切り、「肅清赤化」